

オオヨモギ

Artemisia montana

キク科

名前の由来

ヨモギより大きいことから名付けられた。ヨモギの語源は、灸に用いるという意味で善燃草から由来するという説や、繁殖力が強く、よく萌えることから善萌芽となったという説などがある。別名エゾヨモギ、ヤマヨモギ、モチグサ。

漢字名：大蓬、大艾



オオヨモギ

形態的特徴

大型で高さ1.5~2m、茎は硬く直立する。葉は羽状に深く切れ込み、柄にはひれ状の翼がある。裏面に灰白色の綿毛が密生する。花は淡黄色で小さく2.5~3mmほどで、上部で分岐した茎上に多数、穂状につく。多くの株が群生している光景がよく見られる。

類似種と見分け方

オトコヨモギ（開花期）、エゾトリカブト（山菜採取時）
オトコヨモギは丈が低く、葉はやや厚くて小さく、葉縁の切れ込みが浅い点異なる。

猛毒を持つエゾトリカブトの若芽は、ヨモギの若芽とよく似るので、山菜などで採取する際は注意が必要。エゾトリカブトの若葉には毛がなく、また葉がより深く切れ込むのが相違点。



オオヨモギ。若芽はヨモギ餅などにして食べられるが、猛毒を持つエゾトリカブトの若芽と似るので注意が必要



オオヨモギ。葉の裏には白い毛が密生し、青白い感じ



エゾトリカブト。猛毒。深く切れ込み、葉の裏には毛が無い

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期					■							
結実期					■							

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(葦原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

生育環境・分布

平地から山地にかけて、草原や原野、道端などで生育し、群生することも多い。

分布：国外分布は、温帯に生育し、南千島・樺太。

国内分布は、本州は近畿地方以北から北海道。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、平地から山地にかけて、草原や原野、道端などで普通に見られる。群生することも多い。



オオヨモギ。群生しているのが良く見られる

生活史

開花時期：8～9月

寿命：多年草

開花までの年数：不明

他生物との関わり

ヒメアカタテハの幼虫の食草になる。



ヒメアカタテハ。幼虫時、オオヨモギを食草とする
(標本-吉原利之氏所蔵)



オオヨモギの茎にアブラムシが付いて汁を吸っている



オオヨモギ。花

興味深い話

■食用として若芽や若菜を摘み取り、草餅や草団子にしたり、ゆでておひたし、あえもの、てんぷらなどにする。採取の際は1ヵ所から多数採り過ぎず、間引くようにしたい。

■ヨモギの若芽と、猛毒を持つエゾトリカブトの若芽はよく似るので注意が必要。

■葉を乾燥させたものは漢方では艾葉(がいよう)と呼ばれ、腹痛、下痢、妊娠中の下血、貧血などに薬効があり、風呂に入れて入浴すると、冷え性や神経痛、痔などに効果があるとされる。乾燥させた葉をもみくだき、綿毛を集めたものがモグサで、灸に使われる。

■学名のArtemisiaはギリシア神話の女神アルテミスから由来し、ヨモギに婦人病の薬効があり、アルテミスの聖草とされたことによる。

■十勝地方などのアイヌ語では「ノヤ」という。

■アイヌ語名ノヤは「もみ草」で、ノヤノヤ(もみにもむ)が語源だという。わきがのにおいをもんだヨモギでぬぐって消し、干してもんだものはモグサに使い、更に、もんで強くなった臭気には魔よけの力があると考えられていた。

■アイヌの人たちは、オオヨモギの葉を煮て、黒い汁の出たのを絞ってさらに汁を煮詰めて黒いアメ状にして小さく丸め、胃腸が悪い時に毎日飲んだという。

■釧路地方のアイヌの言い伝えに、「出漁の時の守り神であるキツネの頭骨をイナウ(木幣)で包んだものを持たずに沖にでた国造りの神に対し、キツネが大嵐を起こして挑んだ。しかし、キツネは国造りの神に、ポンノヤアイ(小さい・ヨモギの・矢)で射られ、便槽にされた」というものがある。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類

参考文献

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本Ⅲ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1981

「図説 花と樹の大事典」木村陽二郎・植物文化研究会・雅麗 柏書房 1996

「新版 北海道山菜実用図鑑」山岸喬・山岸敦子 北海道新聞社 1992

「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜細 西社 2002

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館(編)、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004